

## 「不同意表明」が見られる談話に関する一考察 — 日中接触場面での課題解決型議論を基に —

袁 姝

### The Process of Group Decision-Making in Japanese-Chinese Contact Situations: Discourse Structure and Strategies of Disagreement

YUAN Shu

#### Abstract

This study aims to clarify the characteristics of the process of expressing disagreements and responding to them in group decision-making communication. Utilizing sociolinguistics and discourse analysis, this study examines a discussion between 2 Japanese speakers and 2 Chinese speakers.

Discourse which involves disagreement follows a pattern of “target topic – disagreement – subsequent discourse until the end of the topic.” The analysis demonstrated that not only target topics related to the goal triggered a disagreement, but also that utterances about personal feeling and the expressions of personal speaking could. With regard to strategies of disagreement, interlocutors utilized strategies of proposing an alternative plan, expressing an opposing opinion, and using humor to realize disagreement. All the strategies except humor were paired with mitigation strategies to avoid being perceived as face-threatening acts. Additionally, in subsequent discourse, interlocutors also employed strategies of giving examples and offering reasons to strengthen the disagreements expressed before or to express new ones. Follow-up interviews revealed that disagreements are utilized for multiple purposes, including managing the direction of the discourse, improving a proposal, and indicating that they were speaking facetiously. This observation demonstrates the multi-directional and multi-functional nature of disagreements.

The subsequent discourse which follows disagreements can be divided into consent cases, conflict cases, and jocular cases. In consent cases, interlocutors expressed agreement with the disagreement as a positive politeness strategy, which also led to deeper discussion. In conflict cases, interlocutors expressed opposition to the disagreement; in this case, resolution was achieved through a process of clarifying the critical problems underlying the disagreement. However, when disagreement excessively limited interlocutors’ action environment, it became an obstacle to resolution. In jocular cases, interlocutors occasionally use aggressive language for disagreement. However, the frequent laughter indicated that interlocutors were consciously utilizing a jocular mind-set, which offset any potential harm to the relationships.



## 目次

1. はじめに
2. 先行研究
  - 2.1 「不同意表明」の対象について
  - 2.2 「不同意表明」の方略について
  - 2.3 「不同意表明」後の談話展開について
3. 研究の概要
  - 3.1 研究設問
  - 3.2 調査方法
    - 3.2.1 調査参加者
    - 3.2.2 課題解決型議論とフォローアップ・インタビュー
  - 3.3 分析の枠組み
    - 3.3.1 「不同意表明」の判定と分類
    - 3.3.2 「不同意談話」の判定と抽出

## 1. はじめに

職場や大学で、複数の参加者が集まって課題解決型議論を行うことは日常茶飯事となっている。本稿では、課題解決型議論を、ある共通の目的を解決するために「意見や想い」を表明・交換し（村田・井関，2018）、合意の上で結論を出す必要があるコミュニケーションと考える<sup>1</sup>。このような議論は、グループの全員が丸となって成果を出し、統一した価値を生み出すための営みであると同時に、成員一人ひとりが考えをすり合わせ、関係性を共同で構築するプロセスでもある。故に研究者にとってそのプロセスを深く理解することが重要だと考えられる。

課題解決型議論では、意見が衝突することなく最後まで順調に進むとは限らず、不同意を表明したり（以下、「不同意表明」）されたりするケースはよく見られ、議論の効率と成果に影響を与える。「不同意表明」は相手を傷つける可能性があり、状況に応じて慎重に行う必要がある一方、それがきっかけで議論が深まり、よりよい成果につながることもある。したがって、課題解決型議論において、「不同意表明」が見ら

### 3.3.3 抽出したデータの全体像

## 4. 分析結果

- 4.1 不同意の対象
- 4.2 不同意の対象提示に続く「不同意表明」の方略
  - 4.2.1 「代案（+理由）による不同意表明」
  - 4.2.2 「反対意見による不同意表明」
  - 4.2.3 「冗談による不同意表明」
- 4.3 「不同意表明」後の談話展開
  - 4.3.1 「納得→終結」型
  - 4.3.2 「論争→終結」型
  - 4.3.3 「冗談→終結」型
- 4.4 まとめ

## 5. おわりに

## 参考文献

れる談話の実態を掘り下げることが有意義であろう。本研究では、異なる言語文化を背景に持つ仲間で構成される、日中接触場面における課題解決型議論を基に、「不同意表明」がどのような対象に対し、どのように行われるのか、そして「不同意表明」に続く談話がどのように展開し、終結するのかを解明したい。

## 2. 先行研究

「不同意表明」は本質的にコンフリクトを含意し、それ自身が何らかの対象に対する反応であり、また更に後続反応が求められるという性質を有する（Locher, 2004）。そのため、「不同意表明」が見られる談話の構造を「先行発話（不同意の対象）—会話相手の不同意表明—後続反応（先行発話へのサポートや、不同意表明に対するさらなる不同意など）」というプロセスと捉えて考察する先行研究が多数ある（Gruber, 2001, 木山, 2005 など）。本章ではこれらの捉え方を参考にし、談話で見られる不同意の対象、「不同意表明」の方略、そして「不同意表明」後の談話展開について先行研究の知見を整理し、問題点を指摘する。

## 2.1 「不同意表明」の対象について

先行研究によると、「不同意表明」の対象は大まかに「自己卑下や他者への称賛の評価」「事実情報」「意見や評価などの個人による認識」という3種類に分けられている。木山（2005）は「雑談における不同意表明」を「相手に対するプラス評価、または自己に対するマイナス評価」を対象とする「儀礼的不同意」と、そうではない「実質的不同意」に分けている。王（2013）はこの分類基準を踏まえ、「実質的不同意」をさらに「客観的な情報や事実に対する真偽判断の不一致による不同意」と「個人的な判断、意見や評価などの不一致による不同意」に二分している。楊（2009）は「事実情報に対する不一致」「（発話者の）意図と（聞き手の）解釈のずれによる不一致」「認識に対する不一致」という分類法を取り上げているが、「意図と解釈のずれ」も「認識」の範疇を出ていないため、王（2013）と統合できると考えられる。ただし、上記の研究は1対1ペアの雑談を分析対象としており、先行研究では、複数の参加者による課題解決型議論の実態は反映できない。

## 2.2 「不同意表明」の方略について

「不同意表明」は相手の「自分の行動を他者から邪魔されたくないという欲求」である「ネガティブ・フェイス」を侵害してしまうため（Brown & Levinson, 1987）、人間関係に配慮した行動が要求されることが多い。日本語の談話では不同意を間接的に表明したり、「言い差し」「断定回避のモダリティ」「フィラーなどの談話標識」「笑い」（王, 2013）<sup>2</sup>といった配慮行動で不同意の強さを和らげたりすることがよく見られ、「不同意の意図の伝達」と「対人配慮」の兼ね合いを取ることが重要視されている（金, 2015, 趙, 2018）。

接触場面における「不同意表明」研究の多くは、「不同意表明」方略の分類、言語形式及び配慮の伝え方といった局所的特徴に着目し、母語話者と非母語話者の間の類似と相違に焦点を当てている（堀田, 2014, 倉田・

楊, 2010, 蘇, 2013 など）。例えば、堀田（2014）は「不同意表明」の方略を「主要部」（『不同意』が実際に発話内効力を持つ意味的要素）と「補助部」（『不同意』行為の効力を軽減する意味的要素）に分け、前者には「反対意見」「代案」「理由」という下位分類があり、後者には「肯定」「保留」などがある。この分析的枠組みの下で、同論文は日本語母語・中国語母語・日中接触場面の1対1課題解決型議論における「不同意表明」を考察している。統計分析では、日本語母語話者に比べ、中国人日本語学習者の「理由提示先行型」「明確化要求先行型」の過剰使用とヘッジの過剰使用の傾向が見られる。

堀田（2014）を代表とする研究は接触場面で起こりそうな問題を指摘し、日本語教育の現場に貴重な知見を提供している。しかし、これらの研究は母語話者と非母語話者の相違をすべて逸脱と捉え、その背景には「非母語話者は母語話者の使用頻度を手本にすべき」という暗黙の前提がある。接触場面のコミュニケーションは母語話者同士のそれと本質的に異なり、参加者双方が行動様式を調整し、相互理解を共同で構築するプロセスであるため（Fan, 1994）、母語話者の使用実態のみを基準にすることは適切とはいえない。したがって、本稿は「母語話者 - 非母語話者」の二項対立とせず、「多文化共生」立場に立脚する。

## 2.3 「不同意表明」後の談話展開について

課題解決型議論において、合意形成の談話構造に関する研究が多数なされているが（御園生, 2009, 李, 2018 など）、「不同意表明」後の談話展開を中心にしたものがない。そのうち、接触場面を対象とする研究はほとんどなされておらず、日本語母語場面の研究として杉本（2002）などがある。杉本（2002）では、職場において会話者の説明や主張に対して不同意が表明された場合に、それに後続する会話連鎖として「否定・反論—質問—応答」等4種類が観察され、会話者が「正面きっての議論を回避する」様相を浮き彫りにしている。

なお、日常生活では、「不同意表明」を含む冗談の談話も頻繁に行われている。大津（2004）は Bateson（1972）の「フレーム」概念を援用し、日本語母語話者である友人同士の雑談における「遊びとしての対立」の談話展開を考察している。「フレーム」とは、「各人の経験に基づいて構築されるもので、相手の意図を推論したり、解釈していく際に使われる社会的・文化的知識の枠組み（構造）」である（高木，2008）。大津（2004）によると、「遊びとしての対立」には2つのパターンがあり、1つ目は会話参加者が「自ら対立を表明」し、「遊びとしての対立」を始め、展開する方法であり、2つ目は「ボケとツッコミ」パターンで、会話参加者が「わざと誤ったことや理不尽なことを言い」、相手の対立表明を引き出す方法である。「遊びとしての対立」の中で、会話参加者は「おおげさな感情表現」「笑い」等で「遊びの合図」を伝え合い、親密な関係を作る。

以上に基づき、課題解決型議論における「不同意表明」後の談話展開の先行研究について2つの問題点が挙げられる。第一に、「不同意の対象—不同意表明—後続反応」の会話連鎖に関する研究がなされているが、不同意の対象である話題の終結までのプロセスを視野に取り入れていないことである。故に「不同意表明」によって形成された対立が解決されたのか、それとも解決されないまま次の話題に移行したのかが不明であり、研究の成果がいかに実際の議論に活かせるかが懸念される。第二に、課題解決型議論で談話は本筋から冗談へ脱線することがあり（御園生ほか，2009）、「遊びとしての対立」が観察される可能性が十分あり得るが、それに関する研究は未だ見当たっていないことである。

### 3. 研究の概要

#### 3.1 研究設問

第2節では、不同意の対象、「不同意表明」、「不同意表明」後の談話展開に関する先行研究を概観した。それに基づき、本稿では以下の研究設問① - ③の解明

を目標とする。

日中接触場面の課題解決型議論において、

- ①「不同意表明」はどのような対象に対して表出されているのか。
- ②どのような「不同意表明」の方略が用いられているのか。
- ③「不同意表明」に続き、不同意の対象である話題が終結するまでの談話展開（以下、「不同意表明」後の談話展開）は、構造上どのような特徴を持っているのか。

#### 3.2 調査方法

##### 3.2.1 調査参加者

分析には、都内某大学院の日本語教育専攻に所属する日本語母語話者（J1, J2）と中国人日本語学習者（C1, C2）による課題解決型議論の録音・録画データを使用した（表1参照）。4人とも海外長期在住の経験と職歴を持ち、接触場面の課題解決型議論を経験するのは珍しくないという。調査時点で4人は同じ学年であり、1つ以上の同じ授業を半年以上履修している知り合い同士である。授業でよく一緒にディスカッションし、大学でも時々雑談をしているため、協働関係が築けていると考えられる。

##### 3.2.2 課題解決型議論とフォローアップ・インタビュー

課題解決型議論の議題は参加者にとって身近な日本語教育関連のテーマにした。調査当日は参加者に課題シートを配った後、議論を始めてもらった。課題シートは以下の「状況説明」と「候補テーマ」からなり、内容は藤森・伊達（2016, 2017, 2018）<sup>3</sup>の一部を参考にして作成した。

##### ①状況説明

「みなさんのグループは、日本語中級レベルの留学生をサポートするために、5日間分の集中講義の



表1 議論参加者のプロフィール

番号	母語	性別	年齢	母語話者の海外経験／学習者の滞在期間と日本語学習歴
J1	日本語	女性	39	交換留学、海外実習と日本語教育職歴
J2	日本語	女性	36	同上
C1	中国語	女性	25	2017年9月来日 N1合格 上級レベル 来日前 日本語独学＋職歴 来日後 日本語学校・大学院生
C2	中国語	男性	24	2018年3月来日 N1合格 上級レベル 来日前 中国の大学の日本語学部卒業＋職歴 来日後 大学院研究生・院生

教材を作ろうとしています。集中講義は、『生活に役立つ日本語』を教えることを目標としています。授業の形としては、毎日午前と午後に分けて、2つの具体的なテーマを中心に、そのテーマについて様々な場面で使えるような会話と文型を紹介し、学生たちに練習してもらい、コミュニケーション力を向上させるものです。次のように10のテーマを用意していますので、1日目から5日目に、それぞれ午前・午後に何のテーマを教えるかについて話し合い、結論を出してください。時間制限は30分です。」

#### ②候補テーマ＜略称＞

1. サークルと飲み会 ＜サークルと飲み会＞
2. アルバイト（上司、同僚、お客さんとの話し方、理不尽な客への対応）＜アルバイト＞
3. ホテル・民宿の予約、受付 ＜ホテル＞
4. 病院に行く ＜病院＞
5. ホームステイの日本人の家に泊まる ＜ホームステイ＞
6. 日本の乗り物 ＜乗り物＞
7. 美容院に行く ＜美容院＞
8. 面接（アルバイトや奨学金等）＜面接＞
9. 日本人の恋人の作り方 ＜恋人の作り方＞
10. 日本人の友達と一緒に花火大会に行く ＜花火大会＞

課題解決型議論が終わって1週間以内に、参加者を

個別に呼び、60-90分のフォローアップ・インタビュー（以下、「FUI」）を行った。FUIは半構造化の形式で参加者の母語で行い、内容は①調査中の録画された意識、②今までの経歴、③（ビデオによる）具体的な言語行動に対する感想と意図である。議論とFUIの全過程を録画し、宇佐美（2011）に従って文字化している。

### 3.3 分析の枠組み

#### 3.3.1 「不同意表明」の判定と分類

##### ①「不同意表明」の定義と抽出基準

「不同意表明」の定義について、先行研究は①先行発話に反する意味や含意や、発話者の納得しない、または受け入れられない気持ちを示すという性質を有する（堀田，2014，木山，2005，蘇，2013など）、②それ自身が先行発話に対する反応であると同時に、さらに後続反応が要求される（Locher，2004など）という点で共通している。本稿では「不同意表明」を上記の①②を満たす言語行動と定義し、沈黙や笑いといった非言語行動のみで実現されるものは対象外とする。

課題解決型議論から「不同意表明」を抽出するにあたって、本稿は①「不同意表明」の定義を満たすかどうかに関する筆者の判断②前後の文脈における不同意の対象と、後続反応にあたる言語・非言語行動の有無③FUIにおける発話者の意図という3つ

の条件に依拠している<sup>4</sup>。発話の単位は宇佐美 (2011) による「発話文の認定」に従っている。

## ②「不同意表明」の方略・出現位置による分類

本稿では、2.2 で取り上げた堀田 (2014) の「主要部」という概念を踏まえ、「不同意表明」の方略を『「不同意」が実際に発話内効力を持つ意味的要素』と定義する。分類については堀田 (2014) の提示した「代案」「理由」「反対意見」という 3 種類を援用した上、大津 (2004) の「遊びとしての対立」で見られる「冗談」と筆者による「具体例」を加え、総計 5 分類にする<sup>5</sup>。各種類の説明及び本稿のデータから抽出した例文を表 2 にまとめられている (同じ発話文でのいくつかの方略の併用も可能である)。

また、「不同意談話」での出現位置によって違う種類の「不同意表明」がある。不同意の対象の直後に続く「不同意表明」もあれば、その後の談話展開に現れる、「不同意表明」を支える「不同意の補足」や、「不同意表明」に対する「さらなる不同意」もある。本稿ではこれらすべてを分析対象とする。

## 3.3.2 「不同意談話」の判定と抽出

第 2 章の冒頭で述べた、「不同意表明」が見られる談話の構造を参考にし、本稿では、「不同意の対象—不同意表明—不同意表明に続く談話の展開—不同意の対象である話題の終結」(それぞれには 1 発話以上含まれる場合もある) というプロセスを「不同意談話」と定義する。ここでは、課題解決型議論と「不同意談話」との関係性について説明する。

課題解決型議論のプロセスは、話題の転換によっていくつかの段階に分けることができる。ザトラウスキー (1993) を踏まえ、本稿ではこの段階を話段と呼び、「談話の内部の発話の集合体 (もしくは一発話) が内容上のまとまりをもったもので、それぞれの参加者の『談話』の目的によって相対的に他と区分される部分」と定義する。また、話段には小話段という「さらに下位の要素」があり (鈴木, 2007)、いくつかの小話段が話段を成す階層構造のように、話段と小話段でそれぞれ扱う話題も内容上の階層性を有している (村上・熊取谷, 1995)。

表 2 「不同意表明」方略の分類

方略名	方略の説明	例
反対意見	「否定を示す応答表現、遂行動詞、否定的な語彙、反語表現などによって強調された反対意見からヘッジによって緩和された反対意見までを含む」(堀田, 2014)	・「朝から敬語やる? はははは…」 ・「それは、別に、関係ない…ある?」
代 案	「先行発話の命題内容 p の代わりに q ができる、と問題解決のために提示する話し手の意見」(堀田, 2014)	「でもこれ、前にしたほうが、まず予約、ホテル、あとは花火大会。」
理 由	「先行発話の命題内容に対し、同意できない理由の提示」(堀田, 2014)	「(前略) これアルバイトの面接を、含めているので…もし面接も、できなければ、アルバイトも…」
具体例	先行発話の命題内容が成立できない具体的な状況の提示	「例えば、10 月に来た留学生はもう「地名 1」駅にも何度も行ってるし、たぶんそういうのももうわかってる…」
冗 談	冗談フレームにおいて、「遊びとしての対立」会話で行われる、笑いや大げさな感情表現などを伴う「不同意表明」(大津, 2004)	「(恋人の作り方) の授業がほしいという先行発話に対して) 「ほしい、はははは、ほしい? <4 人で笑い>、<< 少し間>>< 自分で>{>}, 自分で< 考えてください>{<}>。」

(堀田, 2014, 大津, 2004 を参考に筆者作成)



表4 課題解決型議論から抽出した「不同意談話」

話段【話題】	小話段＜小話題＞	範囲（行番号）
1【開始の挨拶、目標と設定の確定】	1-4＜課題シートにない設定を補完する＞	53-78
2【1日目の内容の決定】	2-1＜病院と乗り物の提案＞	91-118
3【残りのテーマの分類】	3-2＜恋人の作り方についての冗談＞	174-183
4【2日目の内容の決定】	4-2＜ホテルの予約の提案＞	196-205
5【3日目の内容の決定】	5-2＜敬語を教えるという趣旨の提案＞	242-259
6【4-5日目の内容の決定】	6-2＜アルバイトとホテルを先にやる提案＞	275-281
	6-5＜最後の日の確認がもたらす冗談＞	297-311
7【成果物全体に対する疑問】	7-1＜毎日同じ種類だと飽きるか＞	312-324
8【成果物全体に対する調整】	8-1＜重い話と楽しい話のばらつき＞	363-389
	8-3＜朝から面接を教えるか＞	392-406
	8-4＜ホテルを花火大会に変える提案＞	407-417
	8-8＜花火大会とホテルの順番＞	446-459

表5 「不同意表明」のデータの全体像

出現位置 方略	不同意の対象に続く 「不同意表明」	後の談話展開に現れる 「不同意の補足」	後の談話展開に現れる 「さらなる不同意」	計
反対意見	4	2	3	9
代 案	5	3	1	9
理 由	0	7	2	9
具 体 例	0	3	1	4
冗 談	3	2	0	5
計	12	18	6	36

同意談話」（表4）と36例の「不同意表明」（表5）が抽出された。また、方略の分類の信頼性を保つために、セカンド・コーダーとして日本語母語話者1名に分類を依頼した。その結果と筆者の分類結果によって「Cohen's Kappa」（Bakeman & Gottman, 1996）を算出したところ、0.737という高い一致性を示す値が算出されたため、信頼性が確保されたといえる<sup>6</sup>。

## 4. 分析結果

3.1で提示した研究設問を解明するために、本章では「不同意談話」を構成する個々の部分、つまり不同

意の対象、「不同意表明」の方略と「不同意表明」後の談話展開について分析を行う。

### 4.1 不同意の対象

まず、今回のデータにおいて、不同意の対象にどのようなものがあるのかを解明する。不同意の対象の範囲は、該当小話段における小話題提起の標識から、「不同意表明」の前の言語行動までとする。本稿のデータに限れば、参加者が発した「不同意表明」の対象は4種類に分けることができた。「提案」「成果物の内容」「感情」「語彙の選択」である。これらの種類の説明、及



表 6 本稿のデータで観察された不同意の対象

種類名	説明	具体例
提案	提案を出すための言語行動。	「なんかその、2 と 3 だったら、[中略] 最後に発展した、活動ができそう。」
成果物の内容	前の文脈ですでに話し合いをし、合意に達した成果物の内容を小話題として再度取り上げる言語行動。	(小話段の最初の言語行動として)「なんかその [中略]、だいたい同じカテゴリーで、一日やって、[中略] ちょっと疑問があったんですけど、その ... だいたい、例えばアルバイトと面接の話を一日でやると、飽きちゃう可能性もある ...」
感情	発話者の個人的な感情や、それによる評価を表明する言語行動。	(「恋人の作り方」という授業に対して)「日本の ... こんな授業もあるの? ほしい、はははは<笑い>。」
語彙の選択	言い方や言葉のくっつけ方など、語彙の選択に関するもの。	(「友人を誘って花火大会に行く」と「ホテル、民宿を予約して旅行に行く」の意味で)「誘って、ホテル?」

びデータから抽出した例文を表 6 にまとめた。

2.1 節の先行研究と照合すると、この 4 種類の不同意の対象の中で、「提案」と「感情」は個人の意見や評価といった認識にあたり、先行研究（王, 2013, 楊, 2009 など）と一致している。一方、「成果物の内容」と「語彙の選択」は先行研究で取り上げられていないものである。

上記の 4 種類のうち「成果物の内容」はとりわけ特殊である。「不同意表明」は定義上何らかの対象に対する反応であり、先行研究では、その対象を前の文脈に現れた特定の言語行動・非言語行動と捉えられている。しかし、「成果物の内容」は言語行動・非言語行動のレベルを越えるもので、前の議論の結果として、課題解決型議論の全プロセスを通じた「まとめ」のような存在である。「成果物の内容」は常に参加者の共通認識にあるため、それに対する「不同意表明」は「先行発話」が必要であるとは限らず、同時に「新しい小話題の提起」と「不同意表明」両方として働くことができる。

「語彙の選択」が不同意の対象になる場合、発話者の言い方等が参加者に違和感を感じさせ、「不同意表明」を引き起こす。今回のデータに限れば、不同意の対象である「語彙の選択」はすべて「遊びとしての対立」のきっかけであり、本筋から脱線してしまうが、楽し

い雰囲気づくりには有効であると考えられる。このように、一つの「出来事」である課題解決型議論といっても、不同意の対象になれるものは幅広くあり、議論のフレームと冗談のフレーム両方において「不同意表明」を引き出せることが分かった。

## 4.2 不同意の対象提示に続く「不同意表明」の方略

本節では、不同意の対象となる事柄の提示に続く最初の「不同意表明」の方略の分析結果について述べる。該当する方略は計 12 例抽出され、主に「代案 (+ 理由)」（5 例）、「反対意見」（4 例）と「冗談」（3 例）の 3 種類に分類することができた（「不同意表明」後の談話展開に見られた「不同意の補足」と「さらなる不同意」は 4.3 で後述する）。

### 4.2.1 「代案 (+ 理由)」による不同意表明

「代案 (+ 理由)」による不同意表明は、参加者が相手の提案を直接否定せず、よりよい案の提示に用いる方略である。不同意の意図を示すと共に建設的な意見を出すこともできるため、他の方略に比べて談話の効率を上げられる。例 1 は、4 日目の内容について、残りのテーマの中で先に何をやるかという小話題をめ

ぐる話し合いである。

例1では、「残りの4つのテーマから提案する」という目標が決まり、J2が「2（アルバイト）と3（ホテル）」と提案した（276-278行目）。それに対してC1はすぐ「代案による不同意表明」を示している。279, 281行目でC1はまず逆接詞「でも」を使って不同意の対象との対照関係を映し出し、そしてJ2の提案に反する内容を伝え、「-ほうがいい」のモダリティから「比較」と「推奨」の態度を明らかにしている（日本語記述文法研究会, 2003）。「代案」に続きC1はすぐ「理由」を表明し、途中でJ2とJ1は納得の反応を示したため、C1の「不同意表明」は明確に伝わり、説得力もあると思われる。

2.2で述べたように、「不同意表明」では配慮行動との併用が多いと考えられる。C1の「代案+理由」方略もそうである。例えば、「含めているので…」という「言い差し」は「否定部分を省略」し、「不同意を

和らげ」る効果がある（王, 2013）。つまり、C1は十分な根拠を持ち、躊躇いもせず「不同意表明」を使用したといっても、その同時に相手に自分の意見を押し付けることを回避し、伝え方を工夫している。相手の積極的な反応からみると、フェイスへの脅かしがあるとは考えにくい。

#### 4.2.2 「反対意見による不同意表明」

表2に示したように、「反対意見による不同意表明」は「否定を示す応答表現、遂行動詞、否定的な語彙、反語表現などによって強調された反対意見からヘッジによって緩和された反対意見までを含む」（堀田, 2014）を指し、「代案」のように「具体的に何をするか」という「行動指針」は提供できない。そのため、「反対意見」は単純に相手にチャレンジする「不同意表明」方略になってしまい、相手のフェイスを侵害する可能

例1 代案（+理由）による不同意表明

	番号	発話者	発話内容	不同意談話の構成	発話の意味機能
	271	J2	で、J】。	【不同意の対象】・開始	小話題提起
	272	J1	【残ってるのが…、まだ決まってない<のが… まあ、3番とか>{<}。		小話題提起
	273	C1	<あ、3つ、しか…>{>}2一、3一、<8一、9>{<}。		内容確認
	274	J1	<8と9[頷く]>{>}。		繰り返し
	275	C1	2,3,8,9。		まとめ
→	276	J2	[指で示す] なんかその、2と3だったら…。		不同意の対象 提案
	277	C1	3? なんか J【。		内容確認
	278	J2	J】 受付役の人は、お店、お客さんとの話し方とか[両手を開く](C2: あーそう)、最後に発展した、活動ができそう (C1: [小さな声で] そうですね)。	【不同意の対象】・終了	不同意の対象の続き 提案の理由
→	279	C1	でもなんか面接は、アルバイトの前にやったほうが…、これアルバイトの面接を (J2: あそっかそっかそっか) (J1: うんー[↓])、含めているので…。	【不同意表明】、 【不同意表明に続く談話の展開】・開始	「代案+理由」の 「不同意表明」方略、納得
	280	C2	うーん [↓]。		納得
→	281	C1	もし面接も、できなければ、アルバイトも…。	【不同意表明】の続き	「理由」の続き

性が高いと推定できる。データにある 4 例の「反対意見」はいずれも「肯定的意見」、「言い差し」、「フィラー」などの談話標識」といった多くの「配慮行動」と併用されている。例 2 は、参加者が初日の授業を決める際に、「提案」に対する「反対意見による不同意表明」の例である。

例 2 の冒頭に、C1 は初日の内容について小話題を開始し、「病院と乗り物」の提案を出している。次に J1 と J2 の確認に続いてまた提案の理由を述べ、相手の同意等に伴って 103 行目まで進んでいる。その後、J2 は不同意の対象の直後ではなく、104 行目に至ってから「反対意見による不同意表明」を出している。

J2 の言語形式 (104 行目) をみると、「反対意見」方略と、不同意の強さを和らげる配慮行動との釣り合いがとれていることも分かる。105-106 行目の C1 と C2 による反応から、J2 の「不同意」が的確に伝わっていることが読み取れる。そして、「肯定的意見」と「なんか」の使用も「反対意見」を暗示し、対立を緩和す

る効果がある (堀田, 2014, 王, 2013)。104、107 行目で 2 回も「笑う音色」\*と「大きな声で、強調するトーン」により「なんか」と発している J2 は、あからさまに「病院はよくない」と口にするのを極力避ける姿勢を見せている。J2 以外の 3 人は 105 行目から笑いが止まらず、リラックスした雰囲気の中で「不同意表明」に対応して談話を進めており、誰もフェイスが脅かされることなく、納得もいく様子が窺える。

#### 4.2.3 「冗談による不同意表明」

「代案 (+ 理由)」、「反対意見」と違い、「冗談による不同意表明」は「大げさな感情表現」と「笑い」といった「遊びの合図」を伴い、失礼ともいえる表現も時々登場する (大津, 2004)。例 3 は、J2 の言葉の選択が引き起こした C1 の「冗談による不同意表明」である。

2 日目の内容に関して、99 行目で J2 が「友達を誘っ

例 2 反対意見による不同意表明

	番号	発話者	発話内容	不同意談話の構成	発話の意味機能
	91	C1	じゃまず、なんか、この、この 2 つがすごく重要だと思いますね [↑]、4 番と 6 番。	【不同意の対象】・開始	小話題提起、不同意の対象・提案
	92	J2	病院と。		繰り返し
	93	J1	病院と、乗り物。		同上
	94	C1	病院は、実際はあんまり<笑う音色で>、行ったりしないんですけど、すごく<笑う音色で>、大事な、と。		提案の理由
[続きの理由説明と他人の同意について、8 行省略]					
	103	J1	うん。	【不同意の対象】・終了	短い応答
→	104	J2	あでもすぐー、でも、[手の甲を上、手を伸ばす] 病院も必要だと思うんですけど [手のひらを上]、一日目に病院出ると、なんか<笑う音色>,,	【不同意表明】	「反対意見」方略 (未完了)
	105	C2	= [視線をデスクから J2 に向く] はははは<笑い>。	【不同意表明に続く談話の展開】・開始	理解・納得
	106	C1	あーはははは<笑い>なんか,,		理解・納得
→	107	J2	[大きな声で、強調気味の] <なんか>{<}&。		「反対意見」
	108	J1	< [小さな声で] そうですね>{>},,		理解・納得

例3 冗談による不同意表明

	番号	発話者	発話内容	不同意談話の構成	発話の意味機能
	197	J2	んーで、[指で課題シートを指す]]】。	【不同意の対象】・開始	小話題提起
	198	C1	【= できる。		内容確認
	199	J2	誘って (C1: さそ)、ホテル? =。	【不同意の対象】・終了	不同意の対象・語彙の選択
→	200	C1	= ホテッ [途中で急に笑い出したような、咳み たいな声]、[大きな声、高いトーンで] < 笑う音 色 > 誘ってホテル? =,,	【不同意表明】	「冗談」
	201	J2	=< 民宿、旅行 > {< },,	【不同意表明に続く談話 展開】・開始	(不同意を受け取る結果と しての) 訂正

と一緒に花火大会に行く」と「ホテルや民宿を予約して旅行に行く」という意味で「誘って、ホテル?」と提案したが、その言い方がC1にタブーな連想をさせている。すると、C1は笑いながら驚いた口調で「誘って、ホテル?」と反問し、「冗談による不同意表明」をしている。それはJ2の提案内容に対するものではなく、語彙の選択に誘発されたものである。J2もそれに気づき、201行目で「民宿、旅行」と訂正している。

以上をまとめてみると、不同意の対象に続く最初の「不同意表明」の方略は多様であり、言語形式もバラエティに富んでいることが分かる。また、不同意の対象の直後に表明されるものだけでなく、相手に配慮しつつ確認のやりとりの後で表明される「不同意表明」も見られた。

### 4.3 「不同意表明」後の談話展開

本節では、「不同意表明」に続き、当該の小話題が終結するまでの談話展開を考察する（以下、「不同意表明」後の談話展開）。この部分の範囲は「不同意表明」に続く最初の言語・非言語行動から、該当「不同意談話」の小話題が終結し、次の話題に移行する標識の手前までである。また、4.2.2で述べた「終結」の下位概念である「収束」と「未収束」によって談話の展開パターンを分類している。本稿で観察された「不

同意表明」後の談話展開は「納得→終結」型（3例、すべて収束）、「論争→終結」型（6例、5例収束と1例未収束）、「冗談→終結」型（3例、すべて収束）に3分類できる。

#### 4.3.1 「納得→終結」型

本稿のデータで観察された「納得→終結」型は3例とも「服従や妥協によって収束した」タイプである。このタイプでは、まず参加者が「不同意表明」に対して納得し、「不同意の補足」等で共感を確かめた上で「行動指針」を表明する。それによって合意が形成され、当面の小話題が収束する（図2参照）。

例4は初日の授業に関するJ2の「不同意表明」の後に続く「納得→終結」型談話展開である。

104-109行目で、「病院がよくない」というJ2の「不同意表明」に対して、ほかの3人はみな同意の反応を示し、合意している様子が窺える。そしてC1の「理由」による「不同意の補足」（111行目）に継ぎ、J2も「病気になるかもしれない」と「初日にふさわしい」という「理由」を加え、意見を明らかにしている。

ここで、111-113行目のC1とJ2による「不同意の補足」に重点を置きたい。不同意の対象と「不同意表明」が談話に表面化されたことで、参加者は少なくとも二つの対立陣営に分けられる。しかし、110行目までに全員の理解・納得がそろったため、文脈は対立か

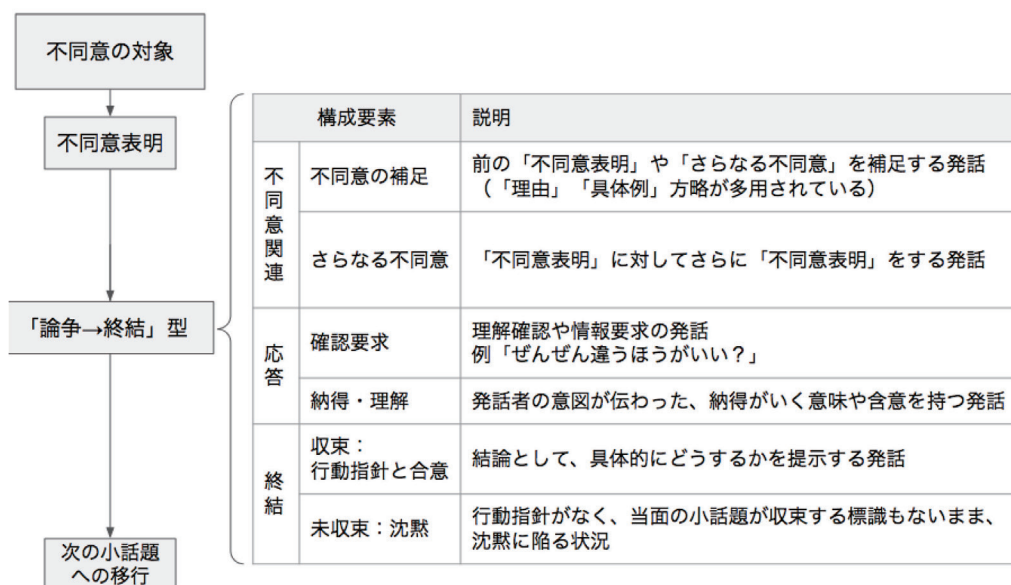


図2 「納得→終結」型の構成要素

例4 「納得→終結」型の「不同意表明」後の談話展開

	番号	発話者	発話内容	不同意談話の構成	発話の意味機能
	104	J2	あでもすぐー、でも、[手の甲を上、手を伸ばす] 病院も必要だと思うんですけど [手のひらを上、何かを示すように]、一日目に病院出ると、なんか<笑う音色で>=,,	【不同意表明】	「反対意見」方略
	105	C2	= [視線をデスクから J2 に向く] はははは<笑い>。	【不同意表明に続く談話の展開】・開始	理解・納得
	106	C1	あーはははは<笑い> なんか,,		理解・納得
	107	J2	[大きな声で、強調気味の] <なんか>{<}		「反対意見」の続き
	108	J1	< [小さな声で] そうですね>{<},,,		理解・納得
	109	J2	はははは<笑い>。		共感
	110	J1	< [J2 のほうに向く] <微笑みながら> 確かに>{<}		理解・納得
→	111	C1	< なんかちょっと>{<}, 気持ち、< 笑いながら>< 気持ち的には ...>{<}		「不同意の補足」
→	112	J2	<< 笑いながら>### っていうか>{<}, 病気になるかもしれないね。		同上
	113	J2	[両手を結んだまま胸に] 初日にふさわしいー。		同上
	114	J1	初日に。		納得・理解
	115	C2	んー [↓]。		納得・理解
→	116	C1	ま、やっぱ、一番目はこれ？ [視線を課題シートから J2 に向く] 乗り物,,		行動指針



117	J2	そうねー。		終結（収束） 合意
118	C1	ですね、たぶん。	【不同意表明に続く談話の展開】・終了	同上
119	J1	あと、どうですかね、ホームステイ [後略]	次の小話題への移行	

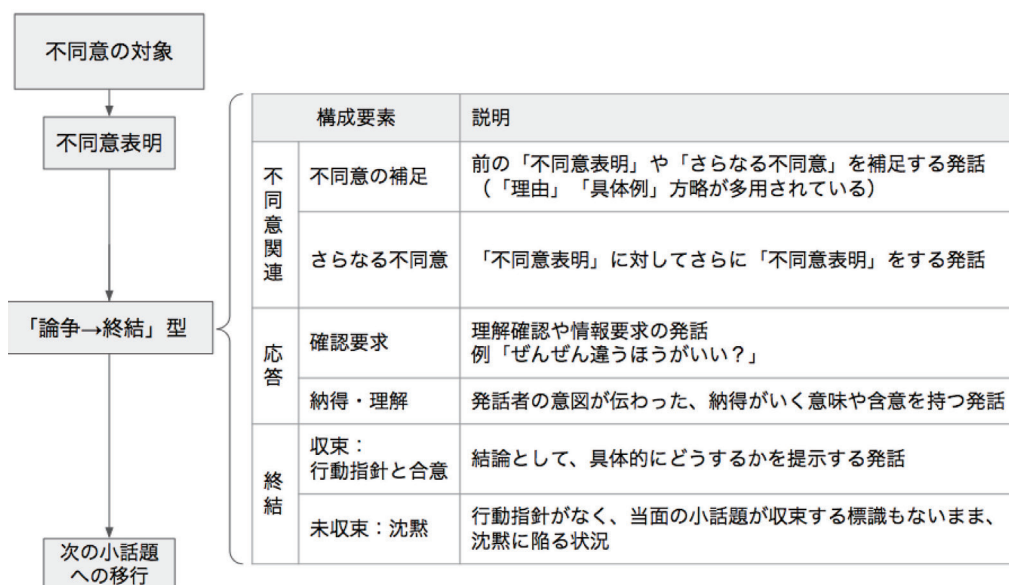


図3 「論争→収束」型の構成要素

ら合意の共同構築に変わり、それ以降の「不同意の補足」は共感を強めるための手段、いわゆるポジティブ・ポリイトネス・ストラテジーとなっている。さらに、初日のトピックとして病院を取り上げることに對して、111-113行目の「不同意の補足」は初日にふさわしいテーマを探す流れになり、「不同意表明」を行うべき本質的な理由に言及している。その文脈で、116行目でC1は「一番目は乗り物？」と提案し、それが「行動指針」になって小話題を収束に導く。ここまで見ると、「不同意表明」による対立は110行目まで既に解消しているが、その後も「不同意の補足」により小話題の収束に貢献していることが分かった。

#### 4.3.2 「論争→終結」型

「論争→終結」型の談話展開は、「不同意表明」に対してさらに不同意が現れ、複数の陣営の意見交換に

よって対立が明確化し、終結するという談話の流れである。「論争→終結」型は「不同意関連」「応答」「終結」などの要素で構成される（図3参照）。12例の「不同意談話」のうち、このタイプは6例あり、最も多いタイプであった。その6例の中の5例は「論争→収束」型であり、1例が「論争→未収束」とであると分類することができた。

##### ①「論争→収束」型

本稿のデータに限れば、「収束」の必要条件として「行動指針と合意」が挙げられる。例5は「収束」の一例である。目下の文脈では、集中講義の対象者について課題シートで「中級レベル」のみ規定されており、学習者が既に日本に住んでいるか、それともこれから来日するかの設定について参加者は話し合っている。

55-57行目から、集中講義の対象者は「日本にいるか、

例5 「論争→収束」型の「不同意表明」後の談話展開

	番号	発話者	発話内容	不同意談話の構成	発話の意味機能
	53	J2	[小さな声で] じゃ ...	【不同意の対象】・開始	小話題開始
	54	C1	たぶん 【。		内容確認
	55	J2	】これから<いる?>{<}		不同意の対象・提案
	56	J1	<来た>{>}=。		同上
	57	J1	=<J2を見て、笑いながら><分かれましたね>{<}。	【不同意の対象】・終了	評価
	58	C2	[視線はJ2からJ1に]<両方とも>{>}、可能性はあるんじゃないですか。	【不同意表明】	「不同意表明」 「代案」
	59	J1	うん?。	【「不同意表明」後の談話展開】・開始	応答 確認要求
→	60	C2	その、例えば私達が授業に参加して、この集中講義の授業に行って、そして先生からのタスクがもらって[ママ]、そして自分で学生たちを募集して参加してもらうような形=。		「不同意の補足」 「具体例」
→	61	J2	=あ、もう住んでいる人?住んでるっていうか。		応答 確認要求
	62	C1	<もう日本にいる?>{<}		同上
	63	C2	<ま、それは[手を振る]、別に...>{>} [小さな声で] 関係ない...ある?=。		「不同意の補足」 「反対意見」
	64	C1	=それとも、うん、もし、普通に、あの一、何なんだっけ、「学校名1」で(J1, C1:うん)学んでる留学生とか(C2:そうですね)、日本語学校にいる留学生とか、たぶん、まあ...。		「不同意の補足」 「具体例」
→	65	C1	<<少し間>>でももうすぐ来る人と、もういる人との区別? [視線は課題シートからJ1, J2の方向に] 違いは、あんまり...。		「不同意の補足」 「反対意見」
	66	J1	なんかもう、いる人達は、いくつかのことは、すでに、<なんか、経験>{<}して,,		「さらなる不同意」 「理由」
	67	J2	<できるかな...>{>}。		応答 納得・理解による共話
	68	J1	できるのかなって(C2:あー、そう[頷く])気がして....,,		(66行目の続き) 「理由」
	69	J2	うん。		応答 共感
	70	C1	うん、まー確かに、そうですね。		応答 納得・理解
	71	J1	例えば、<課題シートを指す>10月に来た留学生はもう日本の乗り物は、「地名1」駅も何度も行ってるし(C2:あー)、たぶんそういうのももうわかってる...。		「さらなる不同意」の補足 「具体例」
	72	C2	そうですね。		応答 納得・理解
	73	J2	これから来て、5日間勉強して、生活していく?,,		終結 行動指針
	74	C1, C2	うん。	【「不同意表明」後の談話展開】・終了	終結(収束) 行動指針への合意

これから来るか、どちらかを決めるべき」という J1 と J2 の共通認識が読み取れる。それに対して C2 は納得できず、「両方とも可能性はある」と「代案」を出している。

C2 の「不同意表明」に続き (58 行目)、「論争→収束」型の談話展開が始まっている。FUI によると、C2 は大学に実在する教育実習のことを思い出し、学生の属性をコントロールできないと考えて「不同意表明」をしたのである。しかし、これは常識や知識とは言えず、説明がないと相手を惑わす可能性がある。それで C2 の「代案」が十分理解できなかった J2 は 59 行目で「確認要求」を発している。C2 は 60 行目で「具体例」を挙げたものの、61-62 行目の確認要求から自分の意図が伝わっていないことに気づく。そこで 63 行目により明示的な方略を使い、「反対意見」を出している。この後、ようやく理解した C1 も自分の意思を明示し、C2 の味方に加わっている。

ここまでみると、C1, C2 陣営と J1, J2 陣営による対立が起きていることが分かる。このプロセスでは、59 行目、60-61 行目の「確認要求」発話が明示的な「不同意表明」を引き出し、対立の明確化に重要な役割を果たしている。対立の表面化は一見すると対人関係に不利だが、「対立の裏にある本質的な問題を明示することは、対立解決の重要な手段となる」こともある (Eder, 1990)。例 5 では、63、65 行目の「不同意の補足」により、C1 と C2 が考えている問題の本質がようやく明らかになる。つまり、「集中講義の作成において、すでに日本に住んでいる中級レベルの学生は、これから来日する同レベルの学生とは区別がない」という考えである。それが分かったからこそ、66-71 行目で J1 と J2 は的を射た「さらなる不同意」を表出することができ、そのことにより C1 と C2 ともに納得し、「行動指針」の表明を経て「小話題」の収束に至ったのではないだろうか。

時間が限られた課題解決型議論において、談話の効率は極めて重要である。なぜなら、曖昧な「不同意表明」方略しか使わないと、後続の「確認要求」に対応する必要が出るため議論が長引き、全員が損をする場

合もあるからである。例えば、例 5 の 60-65 行のような文脈では、ポライトネスにより婉曲的に発言するより、「反対意見」を明らかにするほうが当座の議論に役に立っていると考えられる。したがって、対人配慮のみならず、「反対意見」や明確な「理由」の説明など、文脈に応じた多様な「不同意表明」方略の活用にも注目すべきであろう。

## ②「論争→未収束」型

一方、「論争→終結」型には「未収束」のケースもある。例 6 は、漠然とした「不同意表明」の方略が行動指針の導出に支障をもたらし、全員が沈黙に陥ってしまう「未収束」の一例である。

例 6 の前の文脈では、C1 は「花火大会に行って恋人ができた」とし、「花火大会」と「恋人の作り方」を提案している。それに対して C2 は納得できず、413、415 行目で「代案」と「具体例」を挙げている。その後 J1 も C2 の味方に加わり、416 行目で「理由」を補足している。

416 行目までの「不同意の補足」に対し、C1 は 417 行目で「広すぎ」という理由で「さらなる不同意」を表明している。この「さらなる不同意」は C2 のフェイスを侵害するとともに、例 6 の小話題で言及された選択肢をすべて打ち切り、新しい提案も取り上げていない。故にその後沈黙に陥り、小話題が収束できず不自然に終結している。そこで C1 は再度フロアをとるしかなく、419 行目で新しい小話題を提起している。

Locher (2004) は、「不同意表明」は「行動環境 (action-environment)」を限定することで相手に「パワー」をかける性格を有すると述べている。ただし、それだけで小話題の終結にどのような影響を与えるかは断言できない。例 1 の「面接をアルバイトの前に教えるよう順番を限定する」「不同意表明」や、例 2 の「病院と乗り物の提案の中で病院の選択肢を外す」「不同意表明」ならば、談話の方向性が明確であり、他の選択肢も存在するため、小話題の収束に支障を与えず効率も向上し、課題解決型議論の目標達成に役立つ。

例6 「論争→未収束」型の「不同意表明」後の談話展開

	番号	発話者	発話内容	不同意談話の構成	発話の意味機能
	413	C2	まあそういえば[手で課題シートを指し、C1を見る]、サークルとかも、できるんじゃないですか、	【不同意表明】	「不同意表明」 「代案」
	414	J1	うーん[↓]。	【「不同意表明」後の談話展開】・開始	応答 納得・理解
	415	C2	<乗り物で>{<}。		「不同意の補足」 「具体例」
	416	J1	<出会いもありますけどね<笑い>>{>}。		「不同意の補足」 「理由」
→	417	C1	<笑う音色で>いや、[手で軽くC2の腕に当たるような動作]これはちょっと、広すぎー。		「さらなる不同意」 「理由」
→	418		<<2秒 沈黙>>	【「不同意表明」後の談話展開】・終了	終結 未収束（行動指針と合意の欠如）
	419	C1	[小さな声で、指でドラフトと課題シートを指して確認]10（花火大会）と1（サークルと飲み会）...?。	前の小話題が解決せず、 【新しい小話題の提起】	提案

一方、例6のように「広すぎー」で止まると、相手の「行動環境」を過度に制限し、新しい方向性も提供できなくなる。それによって「行動指針」が出ないまま沈黙に陥ってしまう。「話を続けやすくする」のも日本語会話における配慮の一種であるため（趙，2018）、課題解決型議論で「不同意表明」を使う場合、発話者は相手の「行動環境」の制限を考慮し、次の発話との結び付き方も工夫すべきだろう。

### 4.3.3 「冗談→終結」型

「冗談→終結」型は、話題が議論の本筋から脱線し、

冗談フレームに転換した結果である。決まった要素からなる前述の2つのタイプと違い、「冗談→終結」型は柔軟性をもち、参加者による「遊びの合図」を伝える様々な手段で構成されている。「冗談→終結」型では普段なら口にするのは難しい「不同意表明」が使われ、冗談以外のそれと大別している。また、議論に時間限定があるため、「冗談→終結」型は長く持たず、課題の進捗への言及によって終結する特徴を持っている。

例7では、授業の最終日に「恋人の作り方」と「ホテルの予約・受付」のテーマのみが残り、C2はこの2つのテーマを関連付けて「恋人と、ホテル？」と発

例7 「冗談→終結」型の「不同意表明」後の談話展開

	番号	発話者	発話内容	不同意談話の構成	発話の意味機能
	298	C1	じゃ最後の...最後の日は...。	【不同意の対象】・開始	小話題の提起
	299	C2	恋人と、ホテル?、		不同意の対象・語彙の選択
	300	J1,J2,C1	ははははは<3人で笑い>。		笑い（冗談の合図）
	301	C2	<笑う音色で>ですか...?。	【不同意の対象】・終了	内容確認

→	302	J2	=< 笑いながら > 旅行、ははははは < 4人で笑い >。	【不同意表明】	「不同意表明」 「冗談」
	303	C2	ははははは < 笑いながら > 旅行、ははははは < 4人で笑い >。	【「不同意表明」後の談話 展開】・開始	納得・理解 遊びの合図の伝達
→	304	C1	[大きな声で、高いトーンで] なにかこういう言い方がちょっと、		「不同意の補足」 冗談
	305	J2	< 笑いながら > そうそうそう。		応答 納得・理解
→	306	C1	< 笑いながら > C2さん大丈夫ですか？ははははは < 4人で笑い >、< 危険な >{<}。		「不同意の補足」 冗談
	307	C2	<< 笑う音色で > これたぶん、なんなんなん、なん、>{>} どこ？。		終結 課題への言及によって収束する標識
	308	J1	<< 笑いながら > 9番 >{<}。		終結 応答
	309	J2	<< 笑いながら > 9番 >{>}。		同上
	310	C2	9番、と。		同上
	311	J1	3。	【「不同意表明」後の談話 展開】・終了	同上

話し、全員の合意を確認しようとしている。その言い方が冗談フレームの始まりとされ、全員で遊びの合図の出し合いが始まる。

前の談話で、参加者たちは「恋人を作って旅行に行く」というシナリオで、「恋人の作り方」と「ホテルの受付・予約」を教えようという話をしている。しかし、299行目で、C2は両者を略称で結び付け、タブーなトピックを連想させる言い方をしている。その言い方が、大津（2004）の「わざと誤ったことや理不尽なことを言い、相手から対立を引き出す」という「遊びの対立の開始」と理解されたため、談話は議論から脱線し、冗談フレームに転換されている。

冗談フレームでは、まずJ2が「旅行」を言い、C2の言い方を直接訂正している（302行目）。C2も笑いながら繰り返している。次に、C1は304行目で言い方の問題を指摘したが、その後は言い方からC2自身に焦点を移し、「C2さん大丈夫ですか？危険な」と否定的評価を出している。真剣な議論だと相手のネガティブ・フェイスを傷つけてしまうが、ここでは驚いたトーンや笑いとともに、楽しい雰囲気で行われている。C2を含む参加者も皆一緒に笑い、「冗談だ」と

いう共通認識があってこそ対応だと読み取れる。

例7全体をみると、C2の出した「ボケ」のような発言に対して、C1をはじめの3人は「ツッコミ」役で冗談の合図を伝え合い、にぎやかで楽しい様子が表れている。普段であれば危険性の高い「不同意表明」を「冗談」として平気で言えた背景には、フレームの転換と4人の協働関係に因ると考えられる。突っ込まれたC2は反論する気がないように見え、307行目で当面の進捗に言及して議論の本筋に戻り、冗談を終わらせている。ほかの3人もFUIでこういう言い方が「面白い」と述べており、ポジティブな評価をしている。したがって、このような「冗談→終結」型の談話展開においては、ある特定の「不同意表明」を文脈から切り離して評価するのは適切ではなく、談話の前後文脈と参加者の人間関係などを考慮しなければならないだろう。

#### 4.4 まとめ

4.1-4.3の分析に基づき、日中接触場面の課題解決型議論における「不同意談話」のプロセスに関する特



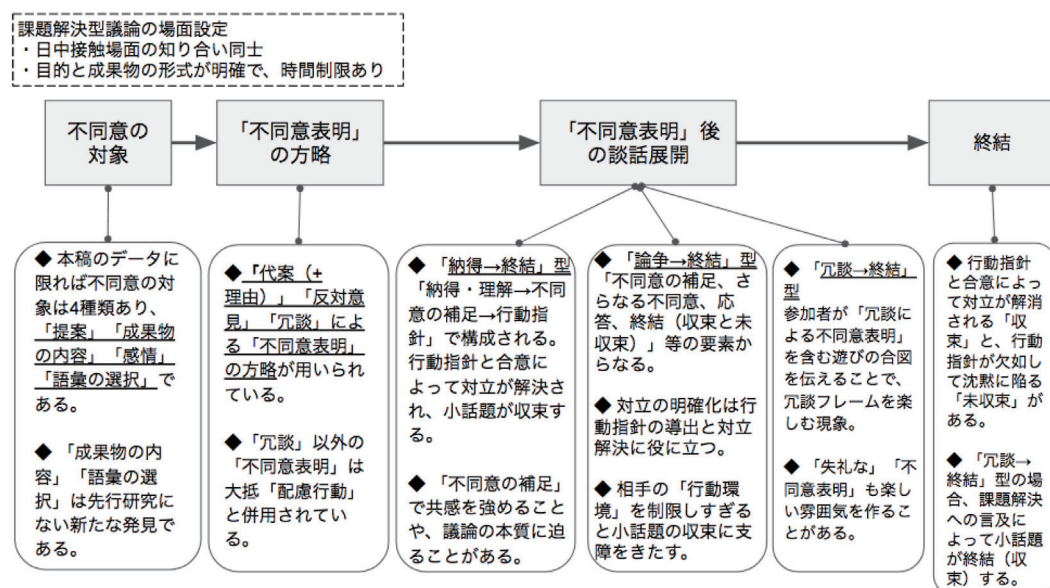


図4 本稿の結論「不同意談話」の構造と特徴

徴を図4にまとめる。その上で、本稿の結論として、研究設問①-③への回答と図4の説明を示す。

研究設問①の不同意の対象については、課題解決型議論において「提案」「感情」「成果物の内容」「語彙の選択」という4種類が見られた。そのうち、「成果物の内容」と「語彙の選択」は先行研究で言及されていないものである。「成果物の内容」が不同意の対象になる原因には、雑談と違う「目的志向」(Locher, 2004)、「成果物を出すという強制性」といった場面設定の影響があると考えられる。「語彙の選択」は実質的な議論の推進には役に立たない可能性はあるが、冗談フレームへの転換と雰囲気作りにつながる。

研究設問②の「不同意表明」方略について、まず、不同意の対象に続く最初の「不同意表明」では「代案(+理由)」「反対意見」「冗談」という3種類の方略が観察され、前の両者はほぼ「配慮行動」と併用されていることが分かった。また、「不同意表明」後の談話展開に見られる「不同意の補足」と「さらなる不同意」では5種類の方略がすべて観察され、特に「理由」「具体例」が多用されていることが分かった。堀田(2014)は中国人学習者の「理由先行型」の過剰使用を逸脱と

捉えており、金(2015)も中国人日本語学習者による「理由説明」の「不同意表明」方略が接触場面のコミュニケーション上誤解を招きかねないと述べているが、本稿では簡潔かつ的確な理由説明の重要性が感じられた。なぜなら、明確な理由説明を行うことにより効率に議論が進んだ例(例1)と、明確な理由説明を行わないことで議論が長引いてしまう例(例5)が見られたためである。また、「理由」の述べ方について参加者全員はFUIで「キャッチボール」を強調している。つまり、理由を説明するか否かというより、一方的に話すのではなく、傾聴的な態度を示した上でやりとりをすることに主眼が置かれている。なお、「反対意見」は建設的意見に直接つながらず、相手のフェイスを侵害する危険性がある一方、「不同意表明」の明確化によって問題の本質に迫ることもある。最後に、冗談フレームでは参加者が「ボケ・ツッコミ」を演じ合うために、あえて悪口ともいえる「冗談による不同意表明」の使用が見られることが分かった。

研究設問③の、「不同意表明」後の談話展開について、本稿のデータからは「納得→終結」型、「論争→終結」型と「冗談→終結」型という3種類の談話展開パターン

ンに分類することができた。

「納得→終結」型では、参加者たちは「不同意表明」について納得した後、「理由」「具体例」などの方略を用いてさらに共感を示すことがあった。これらの発話は議論をより広く・深くし、それによって「行動指針」の表明、さらに小話題の収束に貢献する可能性がある。

「論争→終結」型は、「不同意表明」、「不同意の補足」と「さらなる不同意」によって複雑な対立の態勢が形成されるもので、本稿ではこのパターンが最も多く見られた。この結果は、「正面きっての議論をさける傾向がある」と述べている杉本（2002）との相違が見られる。その原因としては、利害関係のない議題の設定、及び参加者同士の対等的、かつ協働関係が原因にあると考えられる。「論争→終結」型には「収束」と「未収束」という2つのタイプがある。「収束」の場合、一見人間関係に不利な「不同意表明」は逆に問題の本質に迫り、それで「行動指針」の表明と対立の解決に貢献することがある。一方、「未収束」の場合、「不同意表明」は課題解決の選択肢を減らすため、全面的に否定すると、小話題の収束に必要な「行動指針」への合意形成が難しくなり、目的の達成に支障をもたらす。したがって、「不同意表明」の使用にあたっては配慮の伝え方を工夫するだけでなく、談話の方向性を考慮した上で、話を続けやすいように使ったほうがよいと考えられる。

「冗談→終結」型では、課題解決型議論から冗談フレームへの脱線現象が観察できた。この談話展開では、「遊びとしての合図」が伝わる前提で、「失礼」と思われる「不同意表明」が多数用いられている。しかしながら、参加者はお互いに「冗談である」ことを知っているため傷つくと思わず、その雰囲気を楽しんでい

た。ただし、「冗談→終結」型の談話展開は議論の本筋から脱線してしまうため長続きせず、すぐに終結して課題解決の話に戻る傾向もみられた。

## 5. おわりに

本稿では日中接触場面の課題解決型議論における「不同意談話」の特徴を考察した。その結果、「不同意談話」の構成要素である不同意の対象、「不同意表明」の方略、「不同意表明」後の談話展開の多様性が明らかになった。そして対人配慮のみならず、成果物の質の向上、対立の明確化や冗談の合図の伝達など、参加者が様々な目的を持って「不同意表明」を活用し、談話を推進する様相が見られた。これらの分析結果は「「不同意表明」が失礼であると断言できない」ことを証明し、場面・文脈・人間関係を考慮した上で談話を研究する視点の重要性を示している。

しかし、本稿のデータ量には限りがあり、結論を一般化することはできない。非言語行動のみによる「不同意表明」も対象外にしたため、「不同意表明」の全体像が把握できたとは決して言えない。今後はこれらの課題を研究の視野に取り入れ、「不同意談話」の実態に関する事例を積み上げ、より説明力のある理論を構築していきたい。

最後に、本稿は、接触場面の課題解決型議論における「不同意談話」の談話面と意識面を結びつける研究プロジェクトの始まりに位置づけられる。今後は談話研究の延長線上で、発話者の言語計画と言語管理に関する意識構造にも触れようと筆者は考えている。それによって「不同意表明」の使用・回避と規範に関する理解を深めていき、日本語教育の現場に活かしていきたい。

## 参考文献

- Bakeman, R., & Gottman, J. M. (1986). *Observing interaction: an introduction to sequential analysis*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Bateson, G. (1972). *Steps to an ecology of mind*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Brown, P., & Levinson, S. C. (1987). *Politeness: some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University

- Press. (田中 典子他(訳) (2011) ポライトネス言語使用における, ある普遍現象 東京: 研究社)
- Eder, D. (1990). Serious and playful disputes: variation in conflict talk among female adolescents. In Grimshaw, A., D. (Ed.). *Conflict talk*. Cambridge: Cambridge University Press, 67-85.
- Fan, S.K. (1994). Contact situations and language management. *Multilingual*, 13(3), 237-252.
- 藤森 弘子・伊達 宏子(編) (2018) 日本語教育教案・教材集 第3号, 東京外国語大学大学院 (未公刊)
- 藤森 弘子・伊達 宏子(編) (2017) 日本語教育教案・教材集 第2号, 東京外国語大学大学院 (未公刊)
- 藤森 弘子・伊達 宏子(編) (2016) 日本語教育教案・教材集 第1号, 東京外国語大学大学院 (未公刊)
- Gruber, H. (2001). Questions and strategic orientation in verbal conflict sequences. *Journal of Pragmatics*, 33(12), 1815-1857.
- 高木 佐和子 (2008) フレーム 林 宅男(編著) 談話分析のアプローチ 理論と実践 東京: 研究社, 222-225.
- 堀田 智子 (2014) 中国人日本語学習者の「不同意」行為—中間言語用論の観点から—東北大学国際文化研究科博士論文 (未公刊)
- 木山 幸子 (2005) 日本語の雑談における不同意の相互作用—儀礼的の不同意に焦点を置いて—言語情報学研究報告 9, 251-265.
- 金 桂英 (2015) 話し合いでの「不同意コミュニケーション」における「配慮」の様相: 接触場面での物事を決める話し合いの分析から待遇コミュニケーション研究, (12), 35-51.
- 李 霽芳 (2018) 日本語における合意形成談話の研究 東吳大学日本語文学系博士論文 (未公刊)
- Locher, M. A. (2004). *Power and politeness in action: disagreements in oral communication*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- 御園生 陽子・程田 彩・アネークポンパン・ワッチャリン・柳田 しのぶ (2009) 討論の結論に至るまでの過程—日中談話の対照研究— 小出記念日本語教育研究会, 17, 35-49.
- メイナード・K・泉子 (1993) 会話分析 東京: くろしお出版
- 村上 恵・熊取谷 哲夫 (1995) 談話トピックの結束性と展開構造 表現研究, 62, 101-111.
- 村田 和代・井関 崇博 (2018) 話し合い学の領域と研究課題 村田 和代(編) 話し合い研究の多様性を考える, 東京: ひつじ書房, 1-19.
- 日本語記述文法研究会 (2003) 現代日本語文法 4 第8部: モダリティ 東京: くろしお出版
- 西郡 仁朗 (2002) 自然会話データ「偶然の初対面」の公開—その方法論について— 人文学報 330, 1-18.
- 大津 友美 (2004) 親しい友人同士の会話におけるポジティブ・ポライトネス: 「遊び」としての対立行動に注目して 社会言語科学, 6(2), 44-53.
- Schiffrin, D. (1994). *Approaches to discourse*. Oxford: B. Blackwell.
- 杉本 明子 (2002) 職場における相互理解のコミュニケーション構造—否定・反論に対応する言語行動の分析— 日本教育心理学会総会発表論文集 44, 433.
- 杉戸 清樹 (1987) 発話のうけつぎ 国立国語研究所報告 92: 談話行動の諸相—座談資料の分析— 東京: 三省堂, 68-106.
- 蘇 沛紳 (2013) 談話における提案に対する反対意見表明の仕方—JNS と JFL と CNS の相違—東吳大学日本語文学系博士論文 (未公刊)
- 鈴木 香子 (2007) 機能文型に基づく相談の談話の構造分析 早稲田大学大学院日本語教育研究科博士論文 (未公刊)
- 宇佐美 まゆみ (2011) 基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ) 2011 年版 <http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/usamiken/btsj2011.pdf> (2020/10/22 最終確認)
- Vuchinich, S. (1990). The sequential organization of closing in verbal family conflict. In Grimshaw, A., D. (Ed.). *Conflict talk: sociolinguistic investigations of arguments in conversations*. Cambridge: Cambridge University Press, 118-138.
- 王 萌 (2013) 日本人と中国人の不同意表明—ポライトネスの観点から— 福岡: 花書院
- 楊 昉 (2009) 意見の不一致における類型と調整ストラテジー—中国語母語場面と日中接触場面の事例分析— 千葉大学人文社会科学部研究プロジェクト報告書, 218, 65-85.
- 楊 虹 (2016) 中日接触場面の話題転換—中国語母語話者に注目して— 村岡 英裕・サウクエン ファン・高民定(編) 接触場面の言語学: 母語話者・非母語話者から多言語話者へ 東京: ココ出版, 89-110.
- 趙 東玲 (2018) 日中会話の不同意表明に見られる「配慮」の伝え方の分析 人間社会環境研究, 35, 33-48.

## 注

- 1 本稿では大学・職場でよく行われるように、時間を限定し、アウトプットを必要とする課題解決型議論に絞るため、村田・井関（2018）の「話し合い」の定義を参考にした上、筆者が「合意の上で結論を出す必要がある」という条件を付け加えた。
- 2 王（2013）は「言い差し表現」、「『～と思う』『～やろう』『だろうなあ』『～じゃん』（中略）独断的な表現を避ける」表現、「『なんかね』『う～ん』のような言いよどみ」と「笑い」という用語を用いている。筆者はそれを参考にして用語を再編成している。
- 3 藤森・伊達（2016, 2017, 2018）は東京外国語大学大学院国際日本学研究院院長裁量経費（教育分）の助成を得て作成したものである。
- 4 発話行為は文脈、場面的要因等に依存する「situated」という特性を有し（Schiffrin, 1994）、言語形式だけでの判定は難しいと思われる。そこでこの3つの条件によって「不同意表明」を判定している。
- 5 堀田（2014）は「『不同意』行為の効力を軽減する」「補助部」の中、「その他」の一種として「冗談」を取り上げているが、本稿で言う「冗談」はそれと違い、「不同意表明」を実現する方略の一種である。
- 6 「Cohen's Kappa」の値の判断基準について、Bakeman & Gottman（1996）は0.7を超える必要があるとし、西郡（2002）では「経験的には直感的判断が伴う難しいものでは0.7以上」と述べられている。
- 7 文字化データでの「…」表記は「音声的に言い淀んだように聞こえるもの」（宇佐美, 2011）を指し、必ずしも配慮行動の「言い差し」とは限らない。
- 8 「笑う音色」は声を出して笑っていないが、明るい口調で微笑みながらしゃべるイメージを指す。